

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物  
行(毎月一回・十五日發行)可

(通第三二七号)

## 次

社会に於ける内的

制裁力の養成

近角常觀 (1)  
福島政雄 (4)

今永一 (6)

(9)

癌医者になつて

欲 (1)  
福島政雄 (4)

今永一 (6)

(14)

眞実のみ教

松本解雄 (9)

(14)

お盆会を迎えて

松村繁雄 (14)

(14)

眞念佛詩抄

木村無相 (16)

(16)

摂取不捨の直言

花田正夫 (19)

(19)

# 慈

# 光

第二十八卷

第九号

# 社会に於ける内的制裁力の養成

近角常観

教科書問題（明治三十七年頃）は一なる小問題ではない

社会全体が膿み腐されているのが、單に傷口を見出して、その醜態を暴露したものである、故に国民は深く心をひそめてこの警戒に聽くところがなくてはならぬ。教育者は神圣なる職分である、教科書は教訓を示す本である。この人がこの本について腐敗の事実ありとすれば、如何に教育の内的制裁力が弛緩しているかを知るべきである。

ひるがえって社会を顧みると、何れの社会がこれらの事件に対して、十分に制裁を加え得べき資格を有するか。政治家は如何、もし子細に検挙して来れば、なお一層の醜態を暴露するであろう。鉤を盗むものは罪せられ國を盗むものは候たり、と云う如き感がある。然らば社会上唯一の制裁たるべき新聞界は如何、彼等の中に他に對して制裁を加え得べき資格のあるものは寥々たるものである、むしろ平和の服装をした暴君である。よくよく社会の奥底まで見透すと、いづれの社会か他に對して制裁を加えることを揚言

の厳格な精神がなくてはならぬ。從来我国で一時制裁を加えられた人が、再び社会に出ると云うのは、制裁が眞実の制裁でなくして、つまり形式に過ぎないからである。だから制裁を感じることも心中において内的制裁でなければ何の益もない。人が自己の内心において一点やましい点があれば、忽ちこれを控え、その正しいと信ずる事柄であれば与論に反しても主張するというようではなくてはならぬ。単に他の迫害を恐れるとか、名声の如何に懸念して行動云為するような者があれば不眞面目の極である。

人は内的制裁によつて行動してはじめて真摯となるものである。若し人がこの点を顧みないで單に外的制裁ばかりに目を付けて行動するのであればたしかに偽善に陥るようになる、虚名を追う軽薄な人物になるのである。眞個の人物はこの内的制裁をもつて行動する人であつて、健全なる社会とはこの内的制裁が社会における外的制裁にあらわれる事である。

なお一層進んで今日すべての社会がかくまで腐敗したのは何故かといふに、つまり誘惑に対する抵抗力がないからである、腐敗を斥ける勇氣に乏しいからである、この点において今日の社会が如何にも力がとぼしい、現今社会上の腐敗は諸種の点より觀察することが出来る、経済の膨脹に帰することも出来よう、政治的事情に歸することも出来

し得る資格があるであろうか。

かく云うからとて吾人は決して今回の事件をもつて其関係者をゆるせというのではない。他の社会はともかく、教育の社会にこの事のあったことは最も反省すべき点であつて、社会全体も深くこの警戒にかんがみて、各自戒めるところがなくてはならぬ。ここにおいて吾人は、如何なる方法をもつて此社会の腐敗を救うべきかと云う問題を講じようと思う。

社会における制裁力は、單に外的制裁力だけであるから何の効力もない。外的の制裁力には必ず内的の制裁力が伴わなければ何の効果もなかろう。外的制裁力は団体の勢力とか、多数の与論とか、幾多の方針はあるが、つまりこれは団体を形造る各員が中心に深く感じる制裁力を外形にあらわしたに過ぎないものである。又多数の精神上における制裁に抵触する行為に對して、自然に一致した声でなくてはならぬ。故に外的制裁力が有効なためには内的制裁

よう。しかしいずれにしても、つまりはこれは社会上の不平均に帰するだけのことである。社会上の不平均は又社会が矯正せねばならぬ、これを矯正すべき根拠がなくてはならぬ。これには内的の制裁に待つより外に策はない。英國の社会がどうして健全であるか、英國の政治はどうして立憲的に運行するかと云うに、決して制度や組織のためではなく、各個人における内的制裁力がよく養成されているからである。

人間の内的制裁力は如何な方法をもつて養成すべきかといふに、宗教の力を待つより外はない。いやしくも常識を有する人なら賄賂をとるがよいか、悪いかを判断出来ぬ者はない。唯その悪しきをしりぞけ、善きをとるという意志の力が弱いのである。この力強い意志は実驗上宗教の力によらなければとても養成できない。人間は平素考へるときは通常の事でも、実地の場合になると随分つかしいことがある。他から誘惑がくるとき、種々の口実をもつて、いろいろの口弁の下に、自分が自分を欺こうとする、この時これを切り払うもの、この堕落を救済するものは、ひとり偉大なる力ある佛陀の照鑒より外にない。この時において佛陀の救済の力強いのに打ちかつものはない。この時の心中は、いわゆる天知る、地知る、我知る人知る底の明々白なものである。

この制裁力はどのようにして養成されるかと云うに、宗

南条文雄師の英國通信

教に待つことは言うまでもないが、宗教でも厳密にこの佛陀の冥鑑を感じる様にならねばならぬ。宗教は一方では厳格な実行を誇ると共に、一方には無限の救済を説くものである。しかしややもすると救済を説くの極、罪惡を寛容するような誤解におちり易い、この点は最も深く戒心すべき点である。然し人の実行は一種の惰性をもつものである、故に一刻一時、佛陀の威神を感じるように修養せねばならぬ。

それでは、社会全体が如何にして宗教の力を感じるようになるかと云うに、決して一朝一夕にして出来ることではない。しかし実行の方法としては教育の根底に宗教の考えがなくてはならぬ。吾人は歐米各国において宗教教育が、この社会的制裁力を養生するに大いに力あるものと感じる次第である。しかし宗教は一時にその効能をあらわすものではない。しかし幼時からこれが薰陶を得れば、実際問題につきあたつたとき、はじめて偉大な力と清淨な光を發するものである。吾人は教科書問題によつて暴露された社会の腐敗の根本的な救済は、社会の内的制裁力の彈力を強めることにあることを切言する。

「信仰問題」より

## 未 離 欲

福 島 政 雄

幼い頃から人間を相手にすることばかりで生い立つた私は、表面はおとなしいようでも、内心は勝他の心ばかりに充ち満ちていた。身体は小さい時から弱く、とても腕力で人に勝つことは思いもよらなかつたが、何かの点で人にまさうという心はなかなか強かつた。それで小学から中学に進むにつれて勉強して人に勝とうという心を起した。そして身体を犠牲にしてでも学科の勉強はしようと思つた。併し勉強はしても必ずしも人に勝つとはしまつていなかつた。人に勝つこともあり、散々に負けたこともある。負けると更に勇気を振り起すこともあつたが、意氣地なくひがむこともあつた。私のひがみ心は大学を卒業した年頃から次第に著しく現れるようになつた。そして人からおだてられると無暗に調子に乗つてしまつたりした。この傾向は今の私にも変らない。人からお世辞にでもほめられると、自分が一かど立派な人間であるかのように思

いあがつて、やたらに氣位が高くなる。それにお私について離れぬ高踏的氣分というようなものが手伝つて、何とも言われぬ貴族的な調子になる。天下の人々は誰一人として自分の話相手にはならぬというような氣分になる。そんな氣分が暫く続くとやがて私は淋しみのどん底に落ちる。ほんとに人に親しめない自分の姿が見えてきて、何とも云えないやるせない心に沈む。高慢でありながら人は親しみたいという私の矛盾の生命がそこに動く。私はそこへ愛欲のかたまりである自分の姿を見る。誰かを自分の煩惱の相手として自分の眼の前において、それで淋しく沈む自分をゴマ化そうとする、そこに愛欲動乱の私がある。高踏的氣分の私と愛欲動乱の私とがそこに入り乱れて居る。どちらが勝つかと云えば愛欲動乱の私の方が勝つ。もとより五十に近くなるとする私には、さすがに男女の愛欲の動乱は小くなつた。私の愛欲の眼はむしろ子供にむかつてゐる。子供と話したり抱いたり撫でたりして居ると、

私が英國で梵文の佛典を研究している時、或朝早く、同じように留学した某君が突然訪ねて来て云うに

「実は今朝街を散歩していると一人の少年が泣いているのでそのわけを聞くと、街道でボール遊びをしていたがあが出てくるとわびようと思つたがまだ誰も起きて来ないので待つてゐるうちに悲しくなつた、との事であつた。そこで、この店の人は誰もまだ知らないのだろう。それならそのまま家に帰り給えと云うと、少年は眼を丸くしてそれでも神様が知つていられる、と云つた。自分はそれを聞くとはずかしくなつて、走つて来た」と、冷汗を流しながら語つたとのことであつた。

この一文をずっと前に読んだが、何時も心にのこつて、何かの時、思い出される。今回、近角先生の著書『信仰問題』から「内的制裁力の養生」を筆写しながら、南条師の文を思い起してここに書き添えます。

近角先生のこの文は明治三十七年出版の書から頂きましたが、現在の日本に適切なお警告と思ひます。時代は移り状勢は變つても煩惱具足の身の深く反省させられる事です

如何にも嬉しい気持になつて来る。子供の方からも此頃では私に大分なれ親しんできた。自分の子供ばかりでなく親しい友人の子供などにも何となく親しみの心を持つようになつた。私の愛欲生活は少し転向の機に際して居る様だ。

併し一方で女性に対する心持を振りかえつて見ると、決してほんとに超脱して居るのではない。私の心には蛇の如くにまつわる執念がある。それは久遠劫來の私の宿業が織り成した執念である。それは貪欲という形で現れて来る。それを顎色貪、形色貪、妙解貪、供奉貪の四つに分けてあるが、男性が中年以後にもつとも深刻におちつて行く貪欲は供奉貪である。即ち女性から奉仕を受けたいという貪欲である、外面だけでも優しく奉仕する女性があると夢中になつて喜ぶ、そこに男性の愛欲の最も感覚的な浅薄さがある。私は自分が次第にこの浅薄性を発揮するようになつて来たことを感じ自分の姿にしみじみと涙せしめられる。

欲と離れることが私の履むべき道であるのに私は今なお執念深い愛欲の囚の身である。なお名利の欲は年と共に益々私の生命に喰い込んでいる。私は自分が名利に囚われて居ないと宣言したとき最も悲しむべき名利の奴隸たる自己を発見した。自分の面目をふみつぶされるような場面に出逢えば、自分の傲慢性を棚にあげて他人の不遜を責めた。それはすべて自分の、僻み心から出ていることに気づく。

かなかつた。私は全く無反省な生活を続けていた。

昔阿難尊者は釈尊の滅後にいたるまで未離欲であるといふ点で非難せられた、それは釈尊が入滅せられるとき悲泣したという点で責められたのである。併しそれは情の人格としての弱点が美しく現れたのである。これを未離欲といつて責めるのは酷であると私は感じられる。聖者と凡人と比較するは愚かなことではあるが、私の未離欲は勝他の欲や愛欲や名聞利養の欲のすべてにわたって、全く比較にならぬみじめな有様である。この未離欲の私はどうともなるものではない。ただこの一生涯をかけて欲を離れ得ない自己如実の相を、如來の智慧光の下に徹見せしめられ心の中に深く慚愧しつつも、隠しきれぬ自分の全相を、その如來の久遠の親心の前に打ちひらいて生活するばかりである。

尽十方の無碍光は  
無明の闇を照らしつつ  
一念歡喜する人を

必ず滅度にいたらしむ

未離欲の私の一念は如來の至心にかかっている。その至心の涙がほろほろと私にかかるて私の生命はそこに根本的融化の勝縁に遭うのである。

昭和八年十一月十二日。「こころ」

## 癌医者になつて

### 今 永 一

私が大学を出て外科医者になりましてから、もう五十年近くになります。丁度十二年前に名古屋大学を定年退職いたしました時、愛知県のガンセンターが出来まして、そこへ迎えられてまいりました。

それ以来主としてガンの手術をしてまいりましたが、ガンという病気を治療してまいりますと、つくづくガンという病気はたいへんな病気だと思うのであります。アメリカでは原子爆弾を作り、またロケットを作つて月に行けるようになつてから。この世に不可能なものはないと考えて、多額の研究費と強力な研究陣を作つて、ガン制圧に乗り出しましたが、ガン制圧は出来ず、目下のところガンに対してはお手あげの格好であります。

ガンの治療法として現在いろいろなことが行なわれています。放射能療法は遍平上皮ガンで身体の表面にあるガンには効きますが、他のガンには効きません。化学療法も免疫力法も、これだけで治るガンはありません。現在最も頼りになるものは手術療法でありますが、これは局所療法

で、局所に限局している場合のみ有効であります。ところがガン細胞は血管やリンパ管を通じて全身に散ります。そうなりますと、手術療法は無力であります、乳ガンや皮膚ガンなど、身体の表面のガンは、比較的早期にガンを見出しえますが、身体の深部のガンでは発見が困難であります。然し最近は胃ガン、肺ガンなど深部のガンも内視鏡検査、放射線診断法の発達で、早期ガンの発見も可能になつて来ました。

私は、ガンという病気は予防が最も大切であると思います。近頃はガンの原因として食物が重要視されています。現在、発ガン物質として千種以上のものがあげられています。しかし自動車の排気ガスや、ブレーキを使つて発生するアスペクトも肺ガンの原因になります。これは個人の力では防止できません、政治が必要であります。このように現在私共の摂る食物、水、空気の中にいろい

るの発ガン物質が含まれています。こういう社会環境の中で生活している私共はガン脅威にさらされていることになります。従つてガンの予防は大きな社会問題であります。

私がガンにかかりますと、早期に見出されれば、削除して治りますが、ガンが進行して手術の出来ない人、また再発した人は、先に述べたように治療法はないので大変であります。

医者はこのように手術の出来ない、あるいは再発して苦しんでいる患者から逃げてはなりません。このような気の毒な患者を医者はどうあつかうべきかは、大きな問題です。

#### まず医者が生死を越えねば

もう治る見込みのないガン患者に、どうしたら力になつてあげられるか、ということが問題です。ガン患者にガンであることを正直に告げるか、告げない方がいいかを、学会で論じあつた時もございました。こんなことは私はナンセンスだと思います。

シカゴ大学のキュプラー・ロスという人は、その著書『死ぬ瞬間に』で、どうしたらガンで死んでいく人の力になることができ、安らかに死を迎えるようにしてあげられるかということから、この書物を書いたと著者は述べています。この本の中で瀕死のガン患者を病院に入院させて、毎

#### (編者追記)

以上は「名古屋御坊」誌に記載された、青少年会館での今永先生の人生講座の講演要旨でありますが、最後のキュラー教授の「死を超えた人が患者の側にいて貰えると最も安らかに死ぬことが出来る」ということを引用されていきますについて、今永先生の心に深く刻まれたことをお聞きしていますので追記いたします。

それは大正十五年六月のことです。今永先生がよく知つていられた眼科医の安波寅八氏が胃ガンで、死を間近にされた時の口述記であります。

『山口県の臼杵祖山先生の御来訪を受く。先生には十六七年前まだ私が佛をも知らぬ時二度ほどお目にかかつた。其後時々お噂さは耳にするが親しくお目にかかる機会が無かつた。今度私の病篤きを知り、わざわざお訪ね下さったのである。拙著の「信仰と真理」「死の宣告を受けて」は私からかねて差し上げて置いたのをお読み下さったそうである。

お訪ね下さった晩は、丁度私の第三回腹水採取日であったので何もお話を出来なかつた。然し翌朝になつて、先生は私の枕頭に静かに座られて別に何もお話がなく、しばらくして先生は「有難い事です」と冒頭して「昨日小倉の合馬先生(今永先生の叔父上)に一寸、別府まで行つて来ま

日輸血したり、注射したりするよりも、住みなれた我が家で好きな食べものを食べさせた方が、よほど長く生きるといつていますがガンは食べる事が大切です。ところが病院で作った給食は、一人一人の好みに合わせて作ることはできません。愛情をもつて一人一人の好きな食事を作つて食べさせる病院がどれだけありますか。病院に入院させておいて、食べられないや、ブドウ糖でも注射しておればいい、これではあじきないことで、長くは生きられません、まれには手術できない人も、治る人があります。なぜか。免疫によるのであろうとの考えもありますが、現在では説明は困難であります。私はこのような奇蹟は死を超越した人、そして愛情を持つて看護された場合に起つているように思います。

キュラー・ロスの著書の中に、死に行く人が最も安らかに死ぬことの出来るのは、死を解脱し、生死を超越した人が側にいて貰えることが出来る時であると述べています。私は以上のようなことを経験しまして、ガン医者は死を超越しなければ、本当のガン医者ではないと思います。然しこれは口で云うことは易いが実際となると難中の難であります、これは佛様におすがりするより外に方法はありません。信心がすべてを解決して頂けると思います。

(愛知ガンセンター総長)

すと申したら何の御用事ですかと云われるので、別に用事もないが、安波先生は十六七年前に会つただけで顔を見忘れているから顔を見に行つて来ます、極楽に行つて顔を見忘れていると困るから、と答えました」と静かに語られたこの時私は、何とも云えぬ尊さを感じた。先生は口で云われるだけでなく事実の上に現われている。別に私を何かして慰めようという風もなく、又私の今度の体験や感想を聞いて説教の材料にしようという風もなく、唯私の病室に静かにしかも愉快そうに座つて居られる。先生も何時かはお淨土に参られる、私もやがてお淨土に参る、間違いなくお淨土に参る人と人との面会は言葉には云い現わせない味がある云々。』

この臼杵先生も直腸ガンで亡くなられたが、今永先生が最後の診断をせられました由です。この両先生の出会いから、死を超えた人の見舞いの尊さをよく見聞されているから、キュラー教授の言葉を引用されて、その消息を語られたのであります。

覚悟だに要なきまでにみ佛のそだてたまひし  
めぐみ尊し

臼杵老師 遺詠

# 真 実 の み 教

松 本 解 雄

## 一、現 実

私達が平常意義ある生活だとか、意義ある人生だとかいう言葉を不用意の中に使つてゐるが、一体その「意義ある」とは何を意味しているであろうか。人はこの世に生を享けて、嬰兒時代、幼年時代、少年時代とだんだん肉体的に精神的に成育し、所謂一人前になる。しかしながらの思慮、分別の定らない幼少の時代には、親、兄弟、恩師、朋友等の指導教訓に従つて将来のためにその準備をする。若し普通のコースを平穩に進んで行けば、人はそれを成功と言うて喜ぶ。然し途中で思いがけない障礙に遭遇し、所謂事志と違う場合も世間には沢山あるが、それを失敗と名づける。もつとひどい人は、最初から一歩も前進し得ない者すらある。

この失敗や、初から前進し得ない者は、今これを論外として、所謂成功したと称せられる者について言うて見て、それがはたして眞の成功と云えるかどうか反省して来るのである。

質的にはたとえ恵まれなくとも、眞の楽しみはそこにあるとは、実に貴い言葉である。又、「朝に道を聞けば夕べに死すとも可なり」と云われているが、これも人間の価値は五十年の生涯にあるのではなく、その人の踏む道にあることを示している。最初に「意義ある」と云つたのは、その道を規準として見てはじめてその眞実を捉えることが出来るのである。

さて上來述べた道とは何を意味するであろうか。簡単に言えば五倫五常、孝、悌、友、信、義の道である。さてひるがえつて私共が実行できるであろうか、否今現に実行しているであろうかと省みると、恐らく一人も「然り」と答える者はないであろう。内に省みてよいよ道を離れることの遠いのに恥じ入るばかりである。私共は徒らに高遠な現想を説く前に、己が脚下を充分に照顧しなければならない。

すでに親鸞聖人は、二十年の御修行の結果、何を得られたであろうか。佛道に全生命を投げ打つて、ひたすら精進し給うた聖人も「定水をこらすといえども識浪しきりに動き、心月を観せんとすれども妄雲なお蔽う」現実をどうすることも出来なかつたのである。骨を削り、肉を殺いで達せられた最後は地獄一定の御自覚に外ならなかつた。ましてわが身を省みるとき、身に行ひ、口に言い、意に思う

見る必要がある。又よし望み通りの地位や財産を得たとしてそこに眞の満足、安心を得るであろうか。經典にもあるように、地位や財産がある者ほどかえつて反対に別の苦しみを得ることになる。無ければ無いで苦しみ、有れば有るで悩むのが人生の常なのである。これは我々があまりに物に執着するからではあるまいか。人の心は確かに物に支配され勝なものではある、かと云つて物質主義を称えることも間違つてゐる。物に執着し、物を最後の目的とするから、これを得ては喜び、これを失つては悲しんでいるが、結局まさにのべたように苦惱から脱することができないものである。論語に「不義にして富貴なるは我において浮雲の如し」と云い「粗衣を着、粗食を食い、水を飲み肱を枕とするも、楽しみその中にあり」と云つてゐるのは、物が最高至上のものでなく、それを得る正しい道、正しい努力を尊ぶのである。又、道に適つた生活をしていたなら物

どころすべて罪でないものではなく、しかもそれを愧じとせず、文字通り無慚無愧の生活である。教壇では生徒に対して、互におもいやりをと話しながら、疲れた躰で電車の坐席を占めると、老婆の難儀を見まいとする自分ではないか。寸時を惜んで勉強せよと訓えながら、安を愉（ぬす）んで更に悔いのない自分でないか。それでいて毛程でも善いこと、正しいことをした場合（実はそれが不善不正であるかも知れないのに）には得々としてあくまで驕慢になつてゐる。

或人は説く「人は生れながらにして、佛の子であり、神の子であるから、善くなろうとしても無力であると思うのは間違いで、こんな退廃的、消極的人生觀をやめて、光明の生活に入れ」と。成程教の通りに我々の心が清く、明くなれるのなら問題はないが、すでに罪の因を作り、罪の中に入り、愈々死へ近づきつゝある私達は、この免れざる現実に直面して、どうして己の目を覆おうとするのであろうか。英國の詩人は「前を見ては、後を見ては、物欲ととあがるかなわれ。腹からの笑いと云えど、苦しみのそこにあるべし。美しき極みの歌に、悲しさの極みの想、こもるとぞ知る」と。

つまり人間は憂苦の境涯を離れ得ないのである。しかも一方では「諸行無常」であり「夜半に嵐の吹かぬものか

は」である。そうであるのに、無常と聞かされ、他の死を見るも、自分は何時までも死なぬとなつてゐる。これで罪を抱えながら今日の日をゴマカシつつ、のんべんだらりの日暮らしをしているのである。ほかない生死の苦海に住みながら、一向に久しく沈める身であると気づかぬのである。「色は勾えど散りぬるを」までは読み得ても「わが世たれぞ常ならむ」は読み得ないのである。藤村の詩の「名も知らぬ遠き島より流れ寄る桜子の実一つ」のある事は知つても「我もまた渚を枕、ひとり身の浮き寝の旅ぞ」に気づかないのである。

今こそ真摯な心をもつて深く深く内に省みて行かねばならない。そこに、独生獨死、獨去獨來の自分であり、罪惡深重、煩惱熾盛の我身であることに気づく時がやつて来るのである。ここにはじめて救いが絶対に必要になって、求めずに居られなくなつて来る。

## 二、救 濟 と 信

けれども、子の悩む前に親は悩み、子の求める前に親の乳房は用意されていたのである。無限の慈悲と、無限の智慧とを具現される命の御親は、十劫の昔正覚されて「一心正念直來」と常に喚びかけ給うていられる。

彌陀成仏のこのかたは 今に十劫をへたまえり  
法身の光輪きわもなく 世の盲冥をてらすなり

である。底知れない泥土の中に迷いこんで居りながら、わが力をたよつてもがいているならば、ますます深みへ深みへと足を踏み入れるだけである。ただ教のままに聞くべきである。親鸞聖人が「至心に廻向す」とあるのを「至心に廻向したまえり」と味読された御趣旨を深く思うべきである。私共がいすれの行もおよび難い地獄一定である故に、如来の方から私共に廻向して下さったのである。「ただほれぼれと仰ぎまいらす」ばかりである。よるべなき孤独の旅人にみ親の方から「待ちこがれていたよ!」の温いみ声である。

嗚呼、思えば長い迷いであった、重い罪障であった。み親に喚びづめによばれながら、聞く耳なく、み光に照されどおしでありながら、見るに眼なく、流転の旅を続けてきたのであつた。今こそ何の臆する所もなく、慈母の懷の中に抱かれて無碍の一途を歩ませていただくのである。七百年前の山伏弁圓の心境こそは、この私の心境であつた。

「山は山、道は昔に変らねど變りはてたる我が心かな」ほんとうに、今こそ人生の真意義を解らしていただき、使命も知らして貰つた。わが力は弱いが、み親に護られて、世の峻嶮をも越えさせて頂き、荒波も必ず乗り切らせて頂くことが出来るのである。光明照護の下にみ国への旅を辿らせて頂き生死の苦海を渡らせて頂くのである。しかも自己

然しあくまで我執の中に沈淪している私共は、素直にそのみ声を聞くことが出来ない。わが心を見つめるにつけ、やはり清らかになつてから、罪を無くしてからといふ出來もしない事に頭を突込んで、いよいよ迷いを深めて行く。もし自分の力で、清くなり、罪を消すことが出来るならば、弥陀の本願は無用なのである。佛は出世し給わなくてもするのである。然るに聖人は「如來の世に興出したまう所以は、唯彌陀の本願海を説かんとなり。五浊惡時の群生海、まさに如來如實の言を信ずべし」とも、

「彌陀五劫恩惟の願をよくよく案すれば、ひとえに親鸞一大願を起され、これを成就されて南無阿彌陀仏として衆生に廻向されたのである。だから私達は計うところなく、惑うところもなく、み声の喚び給うところに信順したてまつるばかりである。「悩みの心もて真摯に飛込んで行く、ここに眞実の問題を見る」のである。

しかし、もともと易行道でありながら、一方において「難中の難これに過ぎたるはなし」と言われるは何故であろうか、それは外ではない。我々が邪見驕慢であるから

の罪障が照し出されるにつけて、いよいよ本願を仰いで念佛に立ち帰らして下さるのである。

## 三、報恩、感謝、懺悔

さて、真に如來如實の言に信順するとき、おのずから報恩謝徳の心がおこる。たとえば、捨てられながらも、捨てる子のために枝折りする姥の心にふれた子は、心ず懺悔と感謝せずに居られない。御和讃にも

彌陀の名号となえつ

信心まことに得る人は

憶念の心常にして

佛慧功德をほめしめて

信心すでにえんひとは

弘誓の力かぶらずは

佛恩ふかくおもいつつ

婆婆永劫の苦をすてて

淨土無為を期すること

本師釈迦のちからなり

長時に慈恩を報ずべし

何れの時にか婆婆を出でん

つねに彌陀を念ずべし

念仏のおはたらきに外ならない。聖人が現生十種の益の中

に知恩報徳をあげられているのもこのことである。

又この報恩感謝と共に、内心を照らされてさらに深い懺

悔させられる。いよいよ自分の愚、醜、悪の程が知らされるにつけても、佛恩の深重なことが思われ、佛恩の深重なことを仰けば仰くほど、我が身の浅ましさに悲泣する。

「誠に知りぬ、悲しい哉愚禿親鸞 愛欲の広海に沈没し名

利の大山に迷惑して定聚の数に入ることを喜ばず、真証

の証に近づくことを快まず、恥ずべし傷むべし」

「淨土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし

「虚偽不実のわが身にて 清浄の心もさらになし」

と聖人が悲歎されるところ、感謝と懺悔とは不即不離の関係にある。真の懺悔のあるところ、必ず感謝の念を生じ、感謝のおもいのあるところ、必ず懺悔の心が生じるのである。即ち「念々称名常懺悔」こそは念佛の行者の最も真摯なる態度でなければならない。ここに道徳の世界がはじめて開顯せられてくるのである。

如來大悲の恩徳は 身を粉にしても報すべし

師主知識の恩徳も 骨を碎きても謝すべし

## 五、結び

最後に蓮如上人の御一代聞書のお言葉で本稿と結ぶ。

「一宗の繁昌と申すは人の多く集り威の大きいなる事にてはなく候。一人なりとも人の信をとるが一宗の繁昌に候然されば『專修正行の繁昌は遺弟の念力より成ず』と遊ばされおかれ候。」

噫、うけ難き人身をうけ、值い難き仏法に値い奉りて、ただ佛恩の深重なることを仰ぎ、顧みて自己の懈怠なることを愧じ、愈々師友の御指教を受けたく拙文を草した次第である。

勿体なや祖師は紙衣の九十年

昭和十一年

合掌

(あとがき)

松本先生すでに淨土に帰られ、たどたどしい私共の信の歩みを慈眼をもつて照覧下さることであります。この時、京都の学生親鸞会十週年を前に発行されました聖鸞寮誌に投稿下さった原稿を頂きました。編集は東昇先生であります。粗野であと始末も出来ぬ私にくらべ、緻密で冷静で着実な松本先生をこの世で失いましたことは、自分の半身を殺がれた、何とも言えぬ淋しさであります。

(花田記)



# お盆会を迎えて

松 村 繁 雄

今年もまたお盆が参りますが、如何お過しでしょうか

われもまた やがて来るぞと奥津城（おくつき）の

草むしるなり

念佛しながら

私は今、元気ならそれを仕合せと思い、今日が無事ならそれをめでたしと思うてうかうか日を過しておりますが然し無常の風は音もなくきびしく吹きますので、このめでたさは空しくなるもの、私はやがてお墓に送られる身であります。

「まことに死せんときは、かねてたのみおきつる妻子も財宝も、身に添うものと一つもなし」で、妻子も財宝も何の力にならなくなるだけなく、この、おれが、おれがと思うて、ただひとにぎりの灰がのこるだけであります。それが今日ともしらず、明日とも知らずであります。

幸にあと五年乃至十年の限られた命、大切な命が、昨日も過ぎ、今日も消えて、一日一日と無くなりります。

コチコチと きざむ時計の音にきく おのがいのち

「まことに死せんときは、かねてたのみおきつる妻子も財宝も、身に添うものと一つもなし」で、妻子も財宝も何の力にならなくなるだけなく、この、おれが、おれがと思うて、ただひとにぎりの灰がのこるだけであります。それが今日ともしらず、明日とも知らずであります。

幸にあと五年乃至十年の限られた命、大切な命が、昨日も過ぎ、今日も消えて、一日一日と無くなりります。

未だ解脱して苦悔を出するを得ず

燈の風中に滅する期しがたきが如し

忙々たる六道定題なし

云何ぞ安然として驚懼せざらんや  
各強く健かにして力ある時に聞きて  
自策自励して常住を求めよ  
と、きびしくお諒め下さつてあります。

私は今まで、この娑婆を出て如来さまの國に生れるのは、私が死んでからであろうとばかり思つておりました  
が、往生に、身往生と心往生とありまして、信心が定まる  
と共に心は往生させて頂けるのであります。この世から正  
定聚の分人の仲間入りをさせて下さるのであります。そして  
佛心のお光りに照護せられますから、この蟬同様の無智  
の私が「無明の凡夫」と信知させて頂けるのであります。

### 浅原才市さんの法味の一節に

娑婆は、あなたの世界、才市の後生の定まる世界  
ここはあなたの待ち伏せの茶屋

と、ありますように、この娑婆こそ如来様が種々に善巧  
方便をめぐらせて私を救いとげて下さるところであります  
その如来様に誓われ、願われて、私は今、自分が煩惱具  
足の盲の凡夫であることを信知させて頂けるのであります  
なるほど、才市さんの言われるようには、ここはあなたた

の待ち伏せの茶屋、如来さまが、この盲の、蟬同様の私を  
遠い十劫の昔から待ち伏せて下さつて、今ここから如來さまの智慧と慈悲の光明のふところにおさめとつて、煩惱のあろうかぎり、穢身のつきるまで護り続けて下さつて、やがて身命終と共に、往生成仏させて下さるのでありました  
本願力にあいぬれば空しくすぐる人ぞなき  
功德の宝悔みしみちて 煩惱の濁水へだてなし  
如來さまの誓願不思議のお力を信じさせて頂いてみれば  
決して空しくなるという心配はなく、煩惱の浊水のあろう  
かぎりを転じて功德の宝海にとかして下さるのであります  
その宝海へ私は今この煩惱具足のメクラのままで生れ  
させていただくのであります。云々

## 念 佛 詩 抄

### 木 村 無 相

ナムアミダブツと聞かしめて  
われらを助けたまうなり

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

六字のイワレを聞きひらくなり  
六字のイワレとは  
音声の法なれば  
百千音声の法なり

助け上手を聞くのなり  
如來のマコト一つにて

等覺寺師仰せに  
お聞かせが  
御廻向なり  
たまわるなり——

助け上手が如來の本領  
“釈迦彌陀は慈悲の父母  
種々に善巧方便し”  
老少善惡をえらばれず  
如來のマコト一つにて

○  
香樹院師仰せに  
“如來永劫の御修行を  
全體施名として名に体の徳を  
全うしてほどこす法なれば  
百千音声の法なり

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

六字のイワレを聞きひらくなり  
六字のイワレとは  
音声の法なれば  
百千音声の法なり

等覺寺師仰せに  
お聞かせが  
御廻向なり  
たまわるなり——

六字のお聞かせが

御廻向なり

ナムアミダブツと

聞くのが

たまわるなり

ナムアミダブツ

聞くバツカリ

ナムアミダブツ

もうバツカリ

ナムアミダブツ

わが身は

伏明師仰せに

わが身はなにも

知らぬものなりと

思ひて

お聞かせありがたし  
と心得て聞くべし

佛像なしに

樂心院師仰せに

法門知らずに

信心沙汰するは

佛像なしに

開眼を求むるが

如し――

だれに聞こうか

知道師仰せに

お前は

五劫の御思案の相談に

乗つたか

永劫の御修行の御手伝

したおぼえあるか

ないのに

念佛申すのは

わが身はなにも

知らぬ者なりと

思ひで

知らぬ者なり

一文不通――

お聞かせありがたし

お念佛ありがたし

ナムアミダブツ

五一、五、七日 法信より

先生、奥様、私、皆ともに弱く、しみじみと先般も  
書きました牧水の歌が思い出されることです

一、あやふかるいのちを持ちておのもおのも  
生きこらへたり逢はざらめやも

二、寂しさにおのの耐へて在り経つ  
いつか終りとならむとすらむ

法門といふは  
ナムアミダブツ――  
六字はなれて  
信心沙汰するは  
ナムアミダブツ  
正信偈といふこと

正信偈といふことは  
知らぬ人――

法門といふは  
ナムアミダブツ  
六字はなれて  
信心沙汰するは  
ナムアミダブツ  
正信偈といふこと

# 攝取不捨の真言(二)

思ひて  
時とよひゆり

次に第九章の後半の池山先生の意訳を掲げよう。

「またお淨土へはやく往きたいという意向もなくて、身にすこしのわざらいでもあらうものなら、ひよつと死ぬのはなかろうかと心細い感じのするのも、矢張り自分に煩惱のあるせいである。際限もない遠い昔から、今日今時にいたるまでめぐり廻って来た苦惱の旧里、迷いの境涯は去るに忍びず、まだ生れたことのないまことのお淨土は恋しい<sup>羨</sup>がつきてしかたなく死んでゆくとき、いやとうなくお淨土へはまいらせて頂くのである。速く往きたいこころのない私共をば、わけてあわれとみそなわしたまうのである。そうであつてみればなおさら大慈大悲の本願が頗もしくおたすけは間違いないと思しられるではないか。おどりあがるほどに喜んだり、速くお淨土へまいりたかつたりしたなら、はて自分には煩惱がないのかしら、さてはおた

の上にお呆れない大悲でましましたかと、たのもしさに満たされる。それは私共の心情の如何を超えた大悲心のたしかさの徹到である、そこに慚愧と感謝がある。

次に、遠い昔から今日にいたるまで流転してきた苦惱の境涯は去るに忍びず、未知のお淨土は一向に恋しく思えない、名利と愛欲に酔いしれている身であるが、どんなに名残りが惜しくても、この世の縁がつき、薬石も効なくいやおうなくお淨土へまいらせて頂くのである。こうした執着の強い私共をば、わけて憐れとみそなわして下さるのである云々と、大悲の至極を直々に伝えて下さるのである。

すけの本願のおめあてに漏れはしないかと案じられて、かえつていぶかしく思われることであろうと聖人は仰せになりました。」

さて最初の一旬、一寸した病になると死ぬのではないかと心細くなるということは、誰しも経験することである。法然上人は「淨土をねがう行人は病患を得て偏方にこれを飛び起きていそそと旅支度にとりかかるようである」とえられているが、親鸞聖人は心細くなると仰言り、教行信証には「真証の証に近づくことをたのします、恥ずべし、傷むべし」と慚愧せられている。

ここで駄足ながら注意せねばならぬことは、この仰せを聞いて聖人も喜ばれぬと仰言るのだから喜ばなくてよいと横着をきめこみやすい点である。これでよいどころでない、こうした煩惱にしばられたあさましい身をよくご理解して何ぞこれなからん。……これを思わずんば凡衆の攝にあらざるべし、けなげならんこそ、淨土他力の機にあらざるかとも疑つべけれ云々」、「淨土往生の信心成就したらんにつけて此度が輪廻生死のはてなれば、歎きも悲しみもとも深かるべきについて、後桃にならびいて悲歎嗚咽し左右に群集して意慕涕泣すとも更にそれによるべからず」

と、急ぎ淨土にまいりたい心のなくて歎き悲しむより外ない凡情の底をついて、それをことにあわれんで下さる大悲大願のたのもしさをねんごろに教えられる。

花田正夫

この九章によつて生死巖頭を超えた方の実録をここに誌し、百聞は一見に如かずその尊い御体験に学ぼう。

## 一、池山清夫人

池山栄吉先生の奥様の清夫人は大正六年秋に、突然胃癌ですでに手術不能と聞かれ、その絶望の底にあって、仏様のお慈悲ということに気づき、念佛者となられた。その頃夫人のお喜びと、死を見ることが如き落着きには苦の境涯がすぐ難く、淨土も恋しく思われぬとあります、現在の奥様の御様子ではさぞかしお淨土に近づく事が喜ばれましような」とおたずねすると、

「まず凡夫は事においてつたなく愚なり。……たとい未来の生處を彌陀の報土と思い定め、ともに淨土の再会を疑なしと期すとも、後れ先だつ一旦の悲しみ、惑える凡夫と

「いいえ、すこしも死にたいことはありません、一日でも生き延びたいです。主人のため、老母達のため、五人の子供のために生きねばなりません。生きる以上は成るべく苦しみたくない、苦しみを見せて皆を悩ませたくありません。未来のことは何とも思つたことはありませんよ。矢張り歎異抄九章の通りです。併し今この通りおたすけにあづかって居ればこそ氣分だけはこのように元気でお慈悲に護られて日を過ごさせて頂いて居りますうえは、未来も決してお見捨て下さらぬと確信しております。お念佛はすべてのことをよきように解決して下さつて、今、今を慰めて下さいます云々」

とこたえられた。

大正七年一月に近角先生が病床に見舞われ、法話の中に「撫順の炭坑の爆発で一命を拾つた向坊さんは、日頃から剛信のお方であるが、突然の爆発に遭うて人事不省におちた時『しまった！』と大声で叫んだそうである。幸に種々の手當によつて『ナムアミダブツ々々々々』で息を吹きかけた。普通あれほどの信者が、ナムアミダブツならとにかく、しまつたで倒れたのはおかしいと思われ易いが、よく考えて見ると、しまつたよりほかのことは出ぬはずである。ところが、かくしまつた、残念だと叫んで死ななければならぬ、その殘念さを、さぞ残念だろう、その汝を何處い、又周囲の者も同様に認めたようであった。然し段々快方に向かい、後から熟々と考えてみると、本音とは大いに違つてゐることがわかつた。自分は思いきりがよかつたが、子供や信者の方々が気にかかると思つたのは矢張り自分自身の変形に過ぎなかつた。歎異抄の「いさかの所勞（わざらい）のこともあれば死なんするやらんと心細く覺ゆることも煩惱の所為なり」とは此処じや。

大そう殊勝そうに子供等が、信者の方々がと云えど、つまり長々親しんだ苦惱の旧里は捨て難く、名残り惜しく思えども、婆娑の縁つきて、力なくして終る時、であつた。このように婆娑にあらん限りは最後の一念にいたるまで煩惱具足の凡夫で、仏がかねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたのが誠に有難い。若しこの仰せがなかつたらば、けなげに賢善精進の相を現ぜねばならぬであろう。しかるに虚偽不実の私を仏かねてしろしめして下されたればこそ、他力の悲願はかくの如き我等がためなりと知られて往生はいよいよ一定と安心させて頂けるのである云々

と、ある、先生の其後十年余りの御療養中に、昭和十二年

年に御長男の戦死等々のお氣の毒なことも重なつていて、

「今の心境は歎異抄の第九章である。長男の戦死したこと

が、どうしてもあきらめられぬ」と福島政雄先生に仰言つた由である。

までも見捨てぬぞと、このお慈悲が聞こえるから、心の中が、ありがたい、ナムアミダブツとなる。したがつて目が醒めたとき念佛が出たのである云々」

と仰言ると、意外に夫人が非常に喜ばれて

「実は病苦がひどいと念佛しようにも出来ぬことがあります、たとえそうで、お助けに間違いないと頂いていますか、いよいよの時どんな有様で引きとらせて貰えますか、いらぬことながら人様に誤解を与えはせぬかと気になつていましが、しまつたの一言しかないのが本当と承つて、どんな有様で終ろうと心配はないことが分つて大変らくになります」

とお札を述べられた。

## 二、近角常観先生

「信界建現」二十一号（昭和七年十一月發行）に、大病後の感想を述べてゐられるので、要約しよう。

「昭和六年、求道会館落成記念日の十一月三十日に脳溢血で危く一命を失わんとしたが、當時、病状陥悪。いよいよ最後と取りつめた時、一念頭に浮んだことは、本願力自然によつて自分はこのまま参らして頂くことは、一毫も疑う余地は無いか、定めて子供等や信者の方々が悲しみ落胆して下されることであろう、出来ることなら生きられれば結構と思った。その時自分が存外覚悟がよかつたと思

## 三、福田鉄雄氏

長年病臥生活をせられ、最後に胃癌で亡くなられた方であるが、いよいよ死期の迫る日の福島先生への御書簡に、「——私は十八年間の病床生活の間、幾度もあと二ヶ月位とか、長くて三年位の命であろうと医師から宣告されたと家内は申しておりますが、今日までどうやら生きてきました。今度も同様であります。

とにかく、私は誠に心のさもしい人間とつくづく思うのであります、自分の病気を他の人々に吹聴して同情を求める所も、よといたします。このさもしさは一生つきまとうことでしょう。

又平生お念佛を有難がつておりますのに、いざ死が間近かと宣告されたり、自分で思うと、今までの信仰というものがガラガラと崩れ去ります。そして幾度も「親鸞におきてはただ念佛して彌陀に助けられまいらすべしとよき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり……云々」

の第二章や、第九章の

「念佛申しそうらえども、踊躍歡喜のこころおろそかにそ

うろうこと、また急ぎ淨土へまいりたき心の候わぬ」

お先きマツクリで困りましたとか、種々つけ加えなけれ

ばなりません心持が沢山あります。然し結局は、「よくよく案じみれば、天に踊り地に躍るほどに喜ぶべきことを、喜ばぬにて、いよいよ往生は一定と思いたまうべきなり云々」

と、よろこばぬにて淋しいので、お先きマツクラなので自力の難った念仏は崩れるのでと、そこで如来の御まことがどこまであわれと思召すのでと、お念仏申すほかはありません。

お念仏の声は、自分の声かどうか、ただただもうろうとなります。名号不思議という言葉、歎異抄第十一章は、これはありがたいことであります。

毎日の生活としては、一番身近の人々に感謝することを先ず心にかけております。家内と三人の孫達、主治医と副主治医、看護婦等、一日おきに見舞つてくれる小学校時代の友人等々これらの人々に心から感謝をささげることが私のせめてものつとめであります。かくして段々拡げて万物への感謝、私を攝取不捨の恵みにあずからせて下さる如様に感謝の念仏を申すこと、以上であります。

#### 四、生沼曾六先生夫人

私の岡山医大の頃の生理学の教授の生沼先生は、熱心な念仏者であった。先生の奥さんはお二人の御子を残して、

##### ともしび

聚 墓 生

誠なるかなや攝取不捨の真言、超世希有の正法、  
聞思して遅慮することなかれ

(教行信証・総序文)

幼いとき母を亡くした友人が、父は毎日商用に行かねばならぬので、親戚の世話になっていた。親のない子の悲しさに、人の親色ばかりが気にかかり、きらわれはしないか、おこられはしないかと小さい胸をいためていた。

青年になつてもその癖は続いて自己嫌惡の情に苦しんでいたが、歎異抄の中に「攝取不捨」、仏様はおさめとつてお捨てになることはないとあるのを知つた、それは大きな驚きであった。善いとなると手をさしのべ、悪いとなるとあきれられるきびしい人生にあって、どんなことがあっても捨てはせぬと仏様がおつしやてくださる。これこそ久遠の眞実の親のまこと心であると知らされて、迷い子が親にめぐりあえたに等しいよろこびの中から、歎異抄が生涯肌身はなせなくなつた。

釈尊の御在世の晩年に、母にそむき、父を殺害したアジヤセ王が、やがて犯した罪の重大さにめざめて大煩悶におち、自分のような大悪人は地獄より外にない、誰一人とし

肺疾で鎌倉で亡くなられたが、幸に近角先生方に導かれて念仏の人であった。死を自覚されてから御主人の先生に、「私の死後二人の子を抱えられて、後妻もお迎えにならねばなりませんが大変な御苦勞でしょう。どうか聞法して念佛の中におすごし下さるようおたのみ申します」と言い残され、臨終の直前に、看護婦さんに「歎異抄の第九章を読んで下さい」とたのまれ、涙と共に聞き終られると「若い貴女に長い間看護して頂き御礼の言葉もありません。この聖人のお言葉は分りますか、これをどうかよく味つて下さい。私は二人の子を残して行きますが、何時までたってもこんな病状になりながらもあきらめられませんが、この心をすべて知り抜かれて、ことに憐れんで下さる仏様をたのみにして別れざして頂きます。貴女もこの歎異抄をこれからもよく読んで下さい、せめてもの御恩がえしですか」と言い残して淨土へ帰られた。

○  
私自身も大病で入院中にこの章をくりかえし／＼心に浮かべ大きな安慰を頂いた。次々と二人の夫人に先き立れた医師の林田英夫さんが「世間ではお念仏で立派な活動をしている人もあるが、今の自分はこのお念仏に支えられてどうにか生きて貰っている」と、しみじみと語ってくれたことが今もなお耳底に刻まれている。

また、道を求めて三十年、わが身の愚痴、十惡に絶望せられた四十三歳の法然聖人が、奈良や叡山の高僧達を歴訪されたけれど、誰一人からも救いの道は聞けなかつたが、善導大師の教えをひもとかれると「凡夫の往生成仏の道が、ただ念仏一つにあり」と教えられて、身の毛もよだつ喜びの中に念仏の一門に帰入したと述懐していられる。それなのに私共は、世にまたとなし攝取不捨の真言ぞと親鸞聖人から教えられながら、悲しいことに持ちはえの相対五分五分の心に妨げられて、素直に信じられずに、ためらい続けることである。しかし「点滴が岩をもうがつ」ようく倦むことのない仏心は、このへだて根性のやまぬ身をことにあわれんで下さる大悲心でましましたと知らされ素直になつてなどとうぬぼれていた身を慚愧し、かつは慈恩を謝しまつるばかりである。

あとがき

涼風一過、爽涼の秋、みのりの秋が訪れました。心のみのりをも迎えたいものであります。私共の経験は九牛の一毛で知れたものです、未知の教が無尽蔵にひろがっております。いのちは法の宝とやら、御名の光照射の下に、永遠の求道の旅を進ませて頂きます。

○

近角先生の内的制裁力の養成は、恩わざ襟を正さしめられました。英國の歴史学者トインビーが「敗戦後の日本は永年の理念が崩れて、精神的空洞におちている。やがてこれが何で満たされるかを世界中の者が注目している」と云っています。「篤敬三宝」の和国の教主、聖徳皇のみ声が切々と身にしみることであります。

福島先生の未離欲は、我執を根とした如何とも処し難い身を打ち明けて下さつて、そこにそがれる如来至心の涙に触化させられるお喜びを下さいました。

今永一先生は愛知ガンセンターの総長、医療に専念せられると共に、医学の限界を

こえた病人への医師としての心構えについて念仏の大切さを語られました。

松本解庵さん松村繁雄さんは今年初盆を

お迎えになるについて、御遺稿を頂きました。熊本の高十穂徹葉師も初盆、それにつ

けましても、私の学生時代に教をうけました。真田増丸師（佛教濟世軍）が「今日も人の死ぬ日にて候」という句を掲げられてい

たので、「どうしてこれを」とおたずねする

と、「わしがいつも死を忘っているから」とさりげなく答えられて、念仏していられた

事が思出されます。私が三十五の時に、そ

れまでは自分の身体は鉄筋コンクリートの

ようにも思ひあがつていたのに肺浸潤と診断された時「今日も人の死ぬ日にて候」の一句があらためて心に刻みこまれました。

私は死に直面しながら、死の覚悟さえも出来ぬまま大悲のみ手に横抱きにされ

て往生させて頂くばかりであります。

○教西寺法話会。毎月二十四日、午前午後

昭和区小桜町二丁目四番地。

市バス、北山町、又は御器所通り下車。

△御案内△

○一道会例会。毎月、第一、二、三日曜、午後一時半。南区駒上町二の八八、

一道会館。

市バス、新郊通り一丁目下車。地下鉄、

新端橋終点下車。

定価 半年 七〇〇円 (送共)  
一年 一四〇〇円 (送共)

名古屋市南区駒上町二ノ八八  
編集・発行人 花田 正夫

電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

名古屋市南区駒上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座 名古屋一〇四七〇番

郵便番号四五七